
殺し屋と花のような君

条理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺し屋と花のよつな君

【Zコード】

Z4606R

【作者名】

条理

【あらすじ】

これはFuture × Realにつながる(?)話。

恋愛恐怖症な婚活女性、人と距離を置く『最強』の殺し屋、自称仙人(?)なツンデレ男子、自他共に認める女たらしな青年、病弱な訳あり家出娘が織り成す、複雑で不思議な恋愛物語(になる予定)。基本不定期掲載。興味のある方は覗いてつて下さい。

指令0 こいびと探し

銃声が響く。真夜中の誰も通らない裏路地で。

一人の男と、一人の中年男性が向かい合つていた。中年男性は地べたに尻餅を着いたのを気にすることもなく、顔中鼻水や涙でべたべたにしながら懇願していた。

「たつ、助けてくれえ！！命だけは！かつ、金ならホラ！！沢山あるからさあーー！」

その言葉に男が反応するとは無い。代わりにこう思っていた。

（……あなたのことは全く知らない。でも仕事だからこゝで死んでくれ）

男に引き金を引く」ことをためらわなし、それが仕事たかにた。

銃声が響く。
真夜中の誰も通らない裏路地で
人が死んだ。

「これは掛井川市。殺し屋家業と極道の総本山である。

病院の個室の前で、私はどういつ顔をして父に会えばいいのか分からなかつた。

先ほどどの先生の説明が頭をよぎる。

『お父様の体のまづですが、これ以上手術をしても病氣が治る見込みがありません』

『もし手術をしたとしても、少し延命ができるぐらいです』
手術をすれば治ると、言つていいたのに。約束が違う、と先生に問い合わせたかった。

『余命はもつて半年です。場合によれば短くなることもあります』

半年で親孝行なんて出来るわけがない……。どうして父がこんな目に遭わなければならないのだろう。

でもこんな所で思い悩んではいられない。私は無理やり笑顔を作つて病室のドアを叩いた。返事が聞こえたので、ドアを開けた。

「やあ、みはる。先生は何て言つていたんだい？」

昔はかっこよく見えたお父さんも、今では瘦せてつい見る影もなかつた。私は努めて明るい声で言つた。

「手術のおかげで良くなっているんだって。もうすぐ退院でおもておつしあつしていたわ」

でもお父さんは、先ほどまでの和やかな雰囲気から一変して、厳しい顔をして言つた。

「……みはる。嘘は良くないよ。本当のことを語りたい欲しい。わづ
僕は長くないのだりひ？」

見破られていた。やはり私の嘘なんてお父さんには分かつてしまつ
んだ。私はお父さんから体を背けていった

「……本当のことなんて言いたくない。お父さんが悲しむのが田に
見えているから言わないの」

私は作り笑顔が崩れかけていた。田から涙がこぼれそうだった。お
父さんは優しい声で言つた。

「みはる、じつを向いて欲しい。大事な話があるんだ」

私は顔を見られるのが嫌だつたけれど、お父さんのまつを向いた。

「やはり、君は優しい子だね。こんな駄目な父親のために泣いてく
れるんだから」

お父さんは私のまつを向くと、優しく声面でじつ切り出した。
「みはる。僕はあとでね、もう生きられないんだい？」正直に言つて欲
しいんだ」

私は「れ以上お父さんに嘘をつきたくなかった。だから本当のこと
を言つことにした。

「……あと半年だ、って先生がおっしゃっていたの」

それを聞くと、お父さんは満足そうに頷いた。

「半年か……。十分だな。それほど短くなくて安心したよ。これならみはるにお願い事をしても大丈夫だろ？」

「……お願い事つい？」

私は鼻声でお父さんに聞いた。お父さんは笑顔で言った。

「みはるこやつて欲しい」とがあるんだ。簡単にはいかないが。お願いできるか？」

「お父さんのお願いなら……やつてみるー。」

私の言葉を聞いてお父さんは満足そうに頷いていた。

「わつかー、やつてくれるかー！実はな、死ぬ前にやつしてもみはるの花嫁姿が見たいんだ。大事な一人娘である君の結婚式が見てみたいんだ」

けつ、結婚式ー、ビーナス……。私には今恋人すらないのにー！
！軽々しく弓を受けるんじゃなかつたー！

お父さんの言葉に答えるかねてこると、お父さんは急に悲しそうな顔をして言った。

「……無理なら別にいいんだぞ。ただ君と一緒にバージンロードを

歩いてみたかっただけなんだ。気にしないでくれ」

お父さんの悲しそうな顔を見ていたら、つい口をひらいていた。

「大丈夫。心配しないで！！私、必ず素敵な恋人を見つけて結婚して見せるから！！」

言つてしまつた後に気が付いた。私の職場出会いがないじゃない……

こうして私の恋人探しが幕をあけたのであつた。

指令1 すけこましをぶん殴れ！

西暦1990年4月8日、午前9時11分。掛井川市霧原町のところのビルの社長室にて。

そこには一人の男性がいた。一人は恰幅のよい高級そうなスーツを着た頭部が少し寂しくなりかけている中年男性。そしてもう一人はと言つと 金髪の黒いスーツを着た青年だった。

さういふらの金髪、青い切れ長の瞳、よく通つた鼻筋、堅く閉ざした口元。女性なら一度は想像するであろう王子様のよつた美しい青年がそこにはいた。その青年が口を開いた。

「今度こそ私は社長に言いたいことがあります。いい加減私を看板商品として扱つのはやめてほしいのですが」

すると社長と呼ばれた中年男性は悪びれもせず言つた。

「クラウザー、そんなに堅いことは言つた。お前を指名するお客様が多くて大変なのは良おく分かる。が、しかしだ。その苦難を乗り越えてこそ一流の殺し屋じゃがないのか？」

「……言わせてもらいますが、私は好き好んで一流の殺し屋になつたわけではありません。それに社長の行いで一番迷惑しているのは私なのです。あなたが先方に私を勧めるせいで、ここ最近私の休みはありません。少しは休ませていただけませんか」

青年 クラウザーが言つと、社長はこいつ諭した。

「いいが、クラウザー。休みは人を堕落させる魔の期間だ。もし俺がお前に今すぐ休みをやつたとしよう。お前は休みの間ずっとだらだらじるじる自室で過ごす。すると、どうだ。銃の腕前が落ち、そのせいで仕事に行く気力も失せ、一生を部屋で過ごしたくなる。そうしたら、お前二ートになるだら、だから、忙しくしていたほうがいいんだぞ。分かったか！…」

そう言わると、何も言い返すことができなくなってしまった。仕方ない、もう一仕事終わってからこの人に文句を言おうとこう気持ちになってしまった。

「……分かりました。もつじぱらく働いてからあなたに抗議をすることにします。」

肩を落として社長室を出ようとするとクラウザーを呼び止めた。

「クラウザー、ちょっと来い。こいもの渡してやるわ」

社長に近づくと、何やら分厚い茶封筒を渡された。中をのぞくと札束がぎっしりとつまっていた。

「少し給料に色をつけておいた。この調子でがんがん働け！…」

（お金より休みが欲しいけど、満面の笑みを浮かべながらそう言わると何も言い返せない）

そう思つたが、口には出さずお辞儀をして社長室を出て行つた。

社長室を出ると一人の青年がクラウザーを待つていた。その青年は明るめの茶髪に少したれ目の瞳、形の良い鼻、いつも笑みをたたえ

ている口元。全体的にホストクラブなら確実にナンバーワンをとれそうな青年であった。だが青年が着ているのは派手なスースイではなく、クラウザーと同じ黒いスースイであった。

「遅かつたね、波平。社長に文句は言えたのかな？」

「つまく丸め込まれた。休みどころかもつと働けだと」

「相変わらず波平には厳しいんだね。おれなんて週3日も休みがあるからね。あんま期待されてないのかも」

「レン、いいなお前は……。はつきり言つて羨ましいぞ」

クラウザーはその青年 レンに羨望の眼差しをあべりながら言った。彼は飄々とした顔で言った。

「あんまいいつてもんじやないよ。だつて3日も休みがあるんだよ？どの子に先に会おうか迷うじやない。紗希ちゃんも捨てがたいし、加奈ちゃんもいいよね。ああっ、でもタ実ちゃんにも会いたいな、つて悩むんだよ。波平には分かる？このおれの苦悩…」

クラウザーは頭の血管が一本切れたような気がした。そんなクラウザーの様子などお構いなしにレンは語り続ける。そして最後に一言。

「…………といつわけで最近のおれは財布の中が寂しいんだよ。といつ」とだから貧乏なおれにお金貸して

クラウザーは体の調子を確かめた。先ほどまでの疲れが一気に吹き飛んでいる。

この調子なら田の前のすけこましを殴ることもたやすいだろう。

「レン、一発殴らせる」

その言葉を聞いた瞬間、レンは全速力で階段を駆け下りる。それを追うクラウザ。

今日も元気に二人の追いかけっこが始まったのであった。

指令2 婚活せよ！／皮肉屋の相手をせよー

西暦1990年4月8日、午後7時10分。掛井川市瀧沢町のところの保育園にて。

昨日はお父さんの月一回の検診なので仕事を休んでしまったが、さすがに今田は休む訳にもいかなかつたので出勤した。私の職業は保母さんなのだ。

私が勤めるもりやま保育園は何と勤めている人が全員女性という、ある意味楽園のような場所である。昨日休んでしまい迷惑をかけてしまつたはずなのに、園長先生はお家の都合なら仕方がないから気にしないでと言われてしまつた。思わず涙腺が緩みそうになつてしまつた。本当に私にはもつたいたい勤務場所である。

そして今日の仕事を終えた私は、思い切つて園長先生に相談してみることにした。

海よりも広い心を持つていそうな園長先生に相談すれば、きっといい考えが浮かぶに違ひない！そう思つた私はちょうど仕事が終わつたらしい園長先生に声をかけた。

「園長先生、お疲れ様です。あの……少しお時間よろしいですか？聞いて欲しいことがあるんです」

すると園長先生は、笑顔で答えてくれた。

「お疲れ様、みはるちゃん。今日は特に何もないから別にいいけれど……。私なんかが聞いても大丈夫？」

自信がなさそうに言う園長先生に、私は真剣に言った。

「ぜひ園長先生に聞いて欲しいんです。お願ひします！」

すると園長先生は。

「分かつたわ。私が良ければ何でも聞くわよ。」

そう言ってくださったので、私は園長先生に事の顛末を話したのである。

「つまりみはるちゃんは、大事なお父様に花嫁姿を見せてあげたい。けれど現在あなたには結婚できるような相手がないということなのね……。難しい問題ねえ」

「そうなんですね……。園長先生、私どうしたらいいのか分かんないんです。何かいい知恵はありますか？」

そう言つと園長先生は、難しい顔をしながら言つた。

「私の意見なんだけど、やつぱり結婚はまま」とじやないから、慎重に決めたほうが上手くいくと思うの。みはるちゃん、焦つて決めちゃうと後で後悔すると思うわー。時間がないのは分かるけれど、慎重に決めなさい」

「慎重に決めるって、どうやって？」

そう言つと園長先生は、意外なことを言つた。

「とりあえず、前の彼氏に会ってみれば？恋する気持ちを思い出せるかもしれないわ！」

前の彼氏か……。あの人にはうのちよつと恐いなあ。
そう思つたけれど、園長先生の言葉を信じてみることにした。

こうして私の結婚活動略して婚活が本格的に幕を開けたのである。

同日、同時刻。仕事が終わり、会社に帰る途中にて。

私はレンに一発かましたのち、仕事を片付けて会社に戻る途中であつた。

……全くレンの女好きには困ったものだ。聞かざれる」、ちの身にもなつてもらいたい」「

なんて独り言を呟いていたら。

「へえ、相変わらずレンは女を泣かせているのか。興味深いな」

聞きなれた男の声がした。もしかしてと思い、あたりを見回すと奴はいた。

「そして、お前も相変わらずだな。伊波珪蔵。^{いなみ けいぞう}俺を探すなんて、お前もまだまだ修行がなつていな。レンのことと言えないな」

年齢17歳ぐらい。漆黒の短く刈つた髪、見る人によつて印象が大きく異なる笑みを顔に貼り付けているその少年は、背中に大きなりユックを背負つていた。

「……久しぶりだな、^{ふじしま}藤島^{さい}オ。旅の感想をお聞かせ願えないかな？」

私が勝負で一番勝てるかどうか分からぬ知り合い　オが目の前にいた。

指令3 皮肉屋の昔話を聞け！

西暦1990年4月8日、午後7時12分。掛井川市霧原のとある裏路地にて。

普段なら誰も通ることのない、この薄暗く狭い道に一人の人物がいた。一人は伊波珪藏いなみ けいぞう、またの名を殺し屋クラウザーと呼ばれる、金髪の美しい青年。

そしてもう一人は漆黒の短く刈った髪に、見る人によつて大きく印象が変わる笑みを顔に貼り付けている藤島才ふじしま さいと呼ばれた少年だった。

伊波は彼を見て、こう思つていた。相変わらず読めない男だ、と。そんな飄々とした彼の様子を警戒しながら見つめていると、藤島が唐突に口を開いた。

「なあ、伊波。俺の昔話が聞きたいか？」

それを聞いて、伊波は心の中で呆れてしまつた。そして思った。

（また、”アレ”が始まるのか……）

そう思つた伊波の様子を気にすることなく、彼は語り始めた。遠い昔の話を。

あれは周りが騒がしくなっていた頃だったな。ちょうど異国から黒船が来た頃だった。

俺は病で両親を亡くしてしまったんだ。悲しみに浸ることもあったが、いつまでもそうしている訳にもいかない。俺は一人でも生きていくために漁師になることにした。

幸い両親はまともな船を形見に残してくれたし、俺も小さな頃から父親の船に乗せてもらつて漁を見ていたから、同じ仕事をこなすのにそんなに時間はかからなかつた。

その日はとてつもなくいい天気だつた。絶好の仕事日和だつたから、俺は数人の漁師仲間と協力して漁を行つた。だが俺だけはあまり魚を取ることが出来なかつた。

悔しい気持ちで岸に上ると、別の穴場で漁をしていた仲間が何やら酒盛りをしていた。

手招きされたから、その場に行つて見ると美味しそうな刺身がそいつの前にあつた。

”今日は珍しい魚が釣れたんだ。刺身にしてみたらえらく美味くな。お前も食べるか？”

そう言われて俺はその刺身に興味がわいた。そいつに言われるがままその刺身を食べてみた。その味が、とてつもなく美味かつた。普通刺身には醤油とか塩とかつけるが、その刺身はそのままで十分に美味かつたんだ。天と地がひっくり返るような、そんな美味さだつた。

俺は、あとからやつて来た仲間と一緒にそいつと酒盛りをした。さつき魚が取れなかつたことなんてどうでも良かった。そいつらと毎

間から酒を飲んで料理を食つて騒ぎまくつた。間としての最期の日だつた。

その日が俺の人

その日から俺は死ななくなつてしまつたんだ。

「
と言つ訳だ。つまり俺は不死身なんだな」

「…………ほ、あ、り、言、お、う、お、前、の、世、話、を、聞、く、の、は、じ、れ、で、20、回、目、だ、も、う、こ、い、加、減、飽、き、た、」

私は自慢げに昔話を話す才に不満を言った。すると才は悪びれる素振りもなく言った。

「お前は全く馬鹿だな、伊波。お前に昔話を聞かせるのは確かに20回目だが、今までの話とは微妙に語り口が変わっているのに気が付かないのか。本当にお前は大馬鹿者だよ」

今までの語り口とは微妙に変わっているのは気が付いていたが、そんな些細な変化で違うと言い張るこいつは何て奴だ。無茶苦茶な男だ。馬鹿はそっちじゃないか。

なんて思っていたのだが、口に出すのをやめておく。才は繰り返す
にいつた。

「お前今気が付いたけど、少し雰囲気が変わったな。前髪をピンで

留めているし、眼鏡をかけているな。そんなに視力悪くないだろ？
似合わないから止めておけ」

何でお前に髪型や眼鏡のことを言われるんだ、と一瞬苛立ちを隠せなかつた。

すかさず才は私のことを攻め立てる。

「今少し怒つただろ。やつぱりお前は昔のままだ。無鉄砲で何にも考えてなかつたあの頃と全く変わっていない。しかし話していく気が付いたが、お前話し方まで変えて何考えてるんだ？大幅なイメージチョンジか？やつぱり”あのときの事”を気にして」

「黙れ。喋るな」

私は才の頭に拳銃を突きつけていた。才はあの笑みを顔に貼り付けてながら言った。

「撃ちたかつたら撃てばいい。俺は何度でも」

三発の銃声が響いた。彼は脳を撃たれて死んだ　はずだった。

「……痛つてえな。少しは手加減しろよ、伊波」

彼は死んでいなかつた。撃たれた箇所を手で押さえている。

「やはりお前は”死ない”か。これでいくからとも勝敗はつかない」

私はその場を立ち去り立つとする。が、才もついて來た。

「何でついて来る？」

俺は歩きながら才のほうを向いて問うた。才はあの笑み寂しそうな顔をして答えた。

「……伊波が寂しそうだから。あと旅の連れと喧嘩してむしゃくしゃしてた。だからお前にハツ当たりした。悪かったな」「な

珍しく謝ってきた。私は許すことにした。

「私も撃つてしまつて、悪かった。すまない」

そう言つと、才は態度を変えて偉そうにしながら言つた。

「まあ、許してやらなくもない。それと……前髪も眼鏡もそれほど似合わなくもない」

偉そうに言いながらも私のことを気にしていた彼を見て、思わず笑つてしまつた。

そんなことを言つながら、私達は誰も通らない裏道を通りていつた。

指令4 旅は道連れ、でも喧嘩

西暦1990年4月8日、午後7時30分。会社までの帰り道にて。

私は、才になぜ旅の連れ　　永瀬　　来華さんと喧嘩をしたのかを詳しく聞いてみることにした。普段喧嘩を吹つかけるような話し方をする彼が、唯一壊れ物のように大事にしている相手なのだ。喧嘩する要素が見つからない。私は喧嘩の内容に、少し興味があった。

「何で来華さんと口喧嘩なんてしたんだ?お前と彼女、すぐ仲が良かつたじゃないか」

私は、才に問うた。すると才はあからさまに不機嫌になつた。

「あいつ、俺の気持ちをまったく分かつてなかつたんだ。しばらくは顔も見たくない……」

そう言つと、才は黙り込んでしまつた。不老不死もふて腐れることがあるのかと、少し驚く。この調子では、才と彼女の関係が壊れかねない。しかし私は男女間の揉め事ははつきり言つてよく分からないので、あのすけこましに話を聞いてもらひしきないだろう。

「……才、レンと話してみる。さつと良い案が浮かぶぞ」

そう言つと、才は私のほうを向いて言つた。

「そうだな。大馬鹿者のお前には分からぬもんな。俺の気持ちなんて」

……へこんでいても、憎まれ口は通常営業なのか。私は怒りを通り越して呆れてしまった。私達は暗くじめじめした道を、そんなことを喋りながら進んだ。

* * * * *

同日、同時刻。保育園から家までの帰り道にて。

私は少し怖い気持ちもあつたけれど、前の彼氏に会つてみようと思つながら、家路を急いでいた。私の家は閑静な住宅地の中にあるのだが、最近不審者がいる事件が多いので、なるべく早く帰つてしまつて自転車を漕いでいた。

そうしてこの内に家の玄関が見えてきて、一安心した。だがしかし、家の前に何やら怪しげな人影を見つけてしまつた!!私は不審者なのかと思い、ゆっくり自転車を進ませる。

すると不審者はこちらのほうに気づくと、走つて近づいてきた……

(ふつ、不審者!?)早く逃げないと……)

そう思つて、自転車を方向変換しようとしたとき。

「みはる~、久しぶりなのに逃げようとしたしないでよ~

聞きた声がした。振り返つて近づいて見ると、懐かしい顔がそ

こにいた。

「来華！？何でここにいるのーー！」

「家に帰りづらくて、みはるの家に来ちゃつた。久しぶりねえ」

私の高校時代の友達、永瀬来華がそこにはいた。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

同日、午後7時36分。浅庭家リビングにて。

久しぶりに再会した親友は、あまり変わつていなかつた。ただ昔は髪を腰まで伸ばしていたけれど、今はバツサリと切つてショートヘアになつてゐる。最後に会つたときは何か思いつめているような雰囲気だつたけれど、今はそんなこともないようだつた。

長袖Tシャツにジーンズというシンプルな格好の彼女
ソファに座つてあたりを見回していた。

「みはるも、この家も全然変わってないねえ。本当に懐かしいな」

来華はそんなことを言つていた。彼女は確か高校一年のときに、退学届けを学校に提出して、彼女の恩人と一緒に旅をしていたはずだったんだけど。

私はテーブルに彼女と私の分のお茶を出した。彼女は美味しいそうにそれを口に含む。

「ねえ、来華。今まで旅をしていたみたいだけじ、どうして帰つてきたの？あなたの恩人さんは一緒にやないの？」

私が彼女にそう質問すると、彼女はあからさまに元気が無くなつた。

「サイ君は、私を縛りすぎ。私の気持ちなんて分かつてくれないんだもん……」

どうやら彼女の恩人の名前は”サイ君”といつらしかつた。そして彼女はそのまま黙り込んでしまつた。多分喧嘩をしてしまつたのかな、と私はぼんやりと思つた。

とりあえず私が彼女にすることは、部屋を貸し『え』ことだ。

「来華。しばらく家で生活しない？私も今一人暮らしで寂しいし、部屋なら一杯あるから」

そう言つと彼女は、少し考へた後首を縦に振つて言つた。

「ありがとう、みはる。やつぱりあなたつてお人好しなんだね」

寂しかつた私の生活が、少しごぎやかになる予感がした。

指令5 期待と、裏切り

俺は時間に取り残されてしまった人間だ。……いや最早人間と呼べるのかさえ怪しい生物だと思つてゐる。だから俺は自分を名乗るときに”ある自己紹介”をする。

『自分は”不老不死の仙人”である』、ヒ。

長い年月を生きてきて、長い間考へてきた自己紹介の中でもトップクラスの分かりやすさである。自分でも気に入つてゐる。この自己紹介を聞いた奴等の返す反応の大半は、馬鹿にするか、真面目に信じるか、証拠を見せると騒ぎ立てるかの三種類である。

だからアイツと始めて会つたときは、驚きを隠せなかつたのをよく覚えている。

金髪碧眼のハリウッド俳優みたいな顔をしたアイツは、俺の自己紹介を聞いた瞬間、顔色一つ変えずにこつ言つてきやがつたのだ。

『…………それがどうした？それの何が偉いんだ？』

衝撃だつた！－俺の自己紹介を馬鹿にするでもなく、真面目に信じるわけでもなく、証拠を見せると騒ぎ立てるわけでもなく、アイツは涼しい顔で俺の自己紹介を軽くあしらつたのだ……－！

俺はアイツに強い興味と期待を持つた。だが、そんな俺の思いは無残にも崩れることになつた。八年ぶりに会つたアイツ　伊波は、あの頃とは比べ物にならないほどシマラナイトになつていた。

……なあ。俺の持った興味と期待は、どこに置いていけばいいんだ？ただの”無鉄砲馬鹿”から”頭の使える馬鹿”になつたお前に、俺は何を期待していたんだ？

やつぱり俺は、お前が、大嫌いだよ。伊波 瑞蔵 。

俺は、前を歩いている金髪碧眼の殺し屋の背中を見ながら、そんなことを思つた。

* * * * *

西暦1990年4月8日、午後8時11分。掛井川市霧原のビジネス街通りの一角にて。

細い路地を右へ左へと歩いていくと、見慣れた霧原のビジネス街の風景が目に飛び込んできた。残業を終えて帰宅するサラリーマンやOLの姿が、ちらほらと見えていた。それと同時に、同業者や似たような仕事をしている人間なら、一目で分かる不自然なスーツ姿の人間達もちらほらと見えていた。

「……極道だな。隠しているつもりだろうけど、肩に怪我している。多分、ドンパチやつたときに流れ弾が当たったのか？」

隣では、先ほど通りを通りていったガタイのいい男の職業を、推理しているオガいた。

私は、そんな才に正解を告げる。

「最近、寺田組と住吉会の抗争が激化していくな。今分岐どちらの組の所属じゃないか？」

私がそう言つと、オは私を一睨みして、吐き捨てるよつと言つた。

「別にお前に聞いていいよ、伊波。それともアレか？」自分何でも知つてますよ”的な自慢か？……うつとおしいんだよ。独り言か、他人に話しかけているかの区別ぐらい分かるだろ？だからお前は大馬鹿者なんだよ。八年も経つていて、そんな事も分からぬオ「サマ」じゃないよなあ？」

……私はこいつに何か嫌がらせでもしたか？はつきり言つて、何でこいつが怒つているのかが全く分からぬ。これは本気出しても、怒られないよな。でもなあ、通行人の目もあるし、ここでビルの一つでも壊れたら困るだろ？……よし、ここで怒るのは止めよう。

私は自分の感情に強く強く蓋をし、さらに頑丈な南京錠を三つほど心の扉に取り付けた。

私は涼しい顔をし、顔に笑みを貼り付けて、極めて何でもないかのようになに言つた。

「さて、こんな所で立ち話をしているのもなんだから、早く会社に戻ろう。私も早く社長に報告をして家に帰りたいし、お前だつてレンに相談したいことがあるだろ？まあ、早く会社に戻らなければ」

そう一気に言つと私はスタスターと歩き始めた。ここから会社まで五分もかかるない。さつさと社長に報告を済ませて、家に帰つて飯食つて寝よ。こいつはレンに押し付けよ。せつとレンならオのことも甲斐甲斐しく面倒を見てくれるだろ。

そう思つていた瞬間、後ろから殺氣が飛んできた。後ろを振り返ると、不機嫌度MAXの才君の姿があつた。

「ちょっと待て、伊波。お前、今”面倒臭えヤツ”とか思つただろ？俺は仙人だからお前の思つていることなんでお見通しなんだよ。久々に再会して俺が優しくしてやつてれば、お前のその態度は一体何？お前は、俺が何で怒つているのか全つ然分かつてないだろ。俺はお前のその何でもないよう振舞つて、その態度が気に入らないんだよ！」

怒りたきや怒りやあいじやねえか！何我慢してんだよ伊波 瑞蔵
！！トイレ我慢してゆけよ！の顔してんじやねえよ！…この
野郎！！」

頭の血管が一本プチんと切れた。眼鏡を外してスーツの胸ポケットに入れる。体の調子をよく確かめる。先ほどの疲れが一気に吹き飛んでいる。これなら田の前にいる皮肉屋を殺すこともカンタンだ。俺は思つていることを全て曝け出した。

「…………人が黙つて聞いてりやあ、何だその口の利き方は？俺だつてなあ、好きで感情を我慢してねえんだよ、この仙人気取りの糞野郎がつ！！いきなり田の前に現れていきなり偉そうな口利かれて、こつちだつて迷惑なんだよ！！何が”優しくしてやつてる”だ。偉そうに自慢してる独りよがりの自己中野郎のくせに、この殺し屋クラウザーに偉そうな口利いてんじやねえぞ、この振られ虫…！」

言つた瞬間ヤベヒと思つた。田の前にいる藤島が思いつきり怒つていることがよく分かつた。が、引くわけにはいかない。オは無言で、拳を構えた。あれは本気モードだとすぐに分かる。俺もスーツの上着のポケットから愛用の拳銃を取り出す。一触即発の雰囲気が周り

に流れる。俺が拳銃の引き金を引き、才が拳を振り上げながら突進してきた。

その時、俺と才の目の前を塞ぐヤツが現れた。ヤツはすばやい動きで、俺と才の間に割つて入り、俺の喉元にモップの柄を寸止めで突き出し、才のほうには黄色いヘルメットを突き出し、俺たちの攻撃を止めた。そして一言大きな声で集まってきたギャラリーに言った。

「これにて、劇団狸座路上公演”期待と、裏切りの友情”を終了いたします！皆様盛大な拍手を！！そして良ければこの青いバケツに、皆様のお気持ちを入れていただけます！どうもありがとうございました！」

ヤツ レンはギャラリーの田の前に青いバケツを置き、恭しくお辞儀をした。その行動に言葉に釣られ拍手する者や、お金を入れる者が後を絶たなかつた。俺と、才は氣まずくそこに突つ立つていることしか出来なかつた。

* * * * *

「うつひょう！一万円札まで入つてゐる。ちょうど金欠だつたから助かつたよ」

レンは回収したバケツの中身を見ながら、私達にそう言つてきた。私は目の前を歩いている黒いツナギ（バックに”死体命！”と男らしい筆文字で書いてある）を着てゐるレンに問つた。

「何であそこにいた？それにその姿　死体処理班の制服着て何やつてるんだ？」

するとレンは質問に質問で返してきた。

「それよりも！何で藤君がここにいるのかが不思議でしちゃうがないんだよね～。ねえ、波平。藤君とどこで合流したの？それに何で藤君と喧嘩していたの？色々と聞きたいことが満載だよ」

レンは私たちの遙か後ろにいる才に、語りかけるように言った。才はあれから一回も口を開いていない。その様子を見て、レンはやれやれと言つよつうなジェスチャーをした。

「まあ、話は中で聞かせてもらおうかな。その方が色々と良さそうだよね」

そうして私達三人は、薄汚いビルこと”殺し屋・死体処理人派遣会社 丸六”の前へと到着した。これからどんなことを聞かれるか、不安で胸が一杯だった。

指令6 自己中世人とすけじまし

西暦1990年4月9日、午後8時22分。掛井川市霧原にある“殺し屋・死体処理人派遣会社 丸六”社長室にて。

「 以上で、任務を遂行しましたことを、『報告いたします』

金髪碧眼の殺し屋クラウザーは、重厚な作りの木の机を挟んで座っている、中年男性 社長に報告書を提出しながら、そう言った。社長は「『苦労さん』と言いながら、クラウザーが提出した報告書に目を通していた。一通り報告書を読み終えた社長は、顔を上げてじっとクラウザーの目を見た。

「任務の方は、よく分かった。それで、だ。俺に何か言わなきゃいけないことは無いか、クラウザー？」

社長は顔に笑顔を張り付けながら、問いかけた。だか目は全く笑っていない。

それを見て、背中に冷や汗が滲むのを、はつきりと自覚できた。緊張した空気が二人の間に漂う。その時、後ろからその空気をぶち壊すような明るい声が、二人の間を割つて入つて来た。

「ハイ、先生！クラウザー君は公衆の面前で、ドンパチをしようとしていましたー！でも、悪気は無いと思うので、許してあげてくださいー！」

黒ツナギの男 レンは、ふざけた様子でクラウザーの隣に立つて、にこにことした顔でそう言った。

レンのその顔を見た社長は、やれやれと言つよつうなジロスチャーを

した。そして本来の笑顔になると、レンとクラウザーを交互に見ながら、こゝ言つた。

「……全くお前達は、仲が良いな。 クラウザー、今回はレンに免じて許そう。だが、次からは相応の処分を受けてもらつからな。 気を付けるように」

その言葉を聞いたレンはニヤツと口角を上げて、クラウザーにウインクした。

その顔を見て、クラウザーは口パクで、レンに言つた。

『ありがとう、助かつたよ。感謝してる』

それを見て、レンは少しカツコいいぞや顔をした。社長は提出書類にボールペンで色々と書き込んだあと、二人に向かつて無言で手のひらを振った。

”出て行け”の合図だ。一人は合図を見ると、社長に静かに一礼をし、社長室を後にした。

* * * * *

同日、午後8時25分。 ”殺し屋・死体処理人派遣会社 丸六” 多目的スペースにて。

おれは相棒に飲み物を買ってこさせた雑用を押し付けた後、”彼”から話を聞く為に、その姿を探していた。 ”多目的スペース” なんておしゃれな名前が付いているこのフロアは、はつきり言って一般

パートナー

企業の食堂と同じような内装である。そして使用目的も煙草を吸つたり、ご飯を食べたりと食堂と何ら変わらないのだった。

（……何で、むさ苦しい野郎共ばかりなのかねえ。可愛い女の子が一人はいれば、場も華やぐのに）

そんなことを考えていると、”彼”の姿を発見した。

眉間にしわを寄せて、オレンジジュースを飲んでいる”彼”は、おれの方を見ると、かなり不機嫌な顔になつた。おれは”彼”に手を振つて、その席に腰掛けた。

「やあ！待たせてごめんね、藤君　こここのジュースあんま美味しくないけど、大丈夫？今、波平に飲み物買つてこさせてるから、おれが君の相手をするよ。どうぞ、お手柔らかに頼むよ？」

おれは一気に喋ると、”彼”こと藤君の顔色を伺つた。藤君は、不機嫌な顔でオレンジジュースを飲み終えると、おれの顔を見て言つた。

「……ジュースが不味いのは許せる。だが、人の真剣勝負に水を指すような無粋な真似は、正直不快なんだよ。　嘉銘蓮司」

「なははは、ごめんね。でもさ、藤君があそこで死んだら余計大事になつてたからさ。横やり入れさせてもらつちゃつた　まあ、今回はおれの顔に免じて許して、ねつ－この通り！」

おれは両手を合わせて、謝つてみた。しかし、藤君の機嫌は直らなかつたようで、空いたグラスを音を立ててテーブルに置いた。そしておれを睨み付けながら、文句を言い始めた。おれは耳に透明なイ

ヤホンを装・着！馬耳東風を念仏のように心の中で唱え続ける。彼が言つた内容を要約すると、大体こんな感じになると想つ。

「お前な、おれがそんな謝り方で許すと思つてんのか？ああ！？（中略）お前は昔からそつだ。何でも”笑つていれば許してくれる”、つて思つてる節がある。仙人の俺から言わせてもらつと、お前のそういう所が嫌いなんだよ！－（中略）ふざけてんじゃねえぞ、この腐れ野郎！－（中略）ちよつとは俺を敬いやがれ、この人類最低辺の愚民があ！－！」

…………聞いている内に気が滅入つてしまつた。おれは、あらかじめグラスに汲んでいた水に口をつけた。グラスに氷が当たる。カラソ、と軽快な音が鳴る。冷たい水が、体の隅々まで行き届いていく気がする。

冷たい水を喉に流し込むと、思考がクリアーになつてくる。色々と面倒くさい気がしてきた。さて、旧友の愚痴を聞くのもつらくなつてきた。そろそろ反撃に出るとしよう。おれは閉じていた口を、開いた。

『藤君。君、面倒くさい』

「…………はあつ！？お前に面倒くさいって言われたくないわつ！－！」

おれの一言に、藤君が食い付いた。
ツチ”へ誘い込め。

おれは彼に追い討ちをかけるべく、矢継ぎ早に言葉を畳み掛ける。

『だつて、そうじやん。言いたいことは沢山あるかもだけどさあ、要点押さえようよ。ただ威張り散らして、文句言つて、キヨーセイ的に従わせるなんて、幼稚園児でも出来るよ。"不老不死の仙人"がすることでは無いと思つなあ。おれのお祖母ちゃんは、言つてたよ。"本当に偉い人は、謙虚な姿勢でいるものだ。威張つている人は、本当に偉い人ではない"つて。藤君は、どつちなの?前者?それとも、後者?　もちろん前者に決まつているよねえ。だつて仙人なんだから。それ位当然だよね。…………あれ、顔が青白いけど大丈夫?もしかして、貧血だつたりする?』

おれが矢継ぎ早に思つたことを言つと、彼の顔が見る見るうちに青白くなつた。少し苛めすぎたようであつた。おれは軽く手を叩く。すると彼は寝起きの小学生みたいに、体がビクツ、つてなる。この瞬間が、おれは大好きである。

眠りから覚めた藤君は、息を荒げている。顔は真っ青で、額には冷や汗が浮かんでいる。

その形相で、おれに聞いてきた。

「…………お前、今何した?」

その答えを、おれは笑顔で

はぐらかす。

「べつにー。何にもしてないよ。もしかして、藤君。純真無垢なおれを疑う気?疑われて、レン君悲しいぞつー!」

おれの言葉を聞いて、藤君は呆れ果てた様子で言つた。

「お前、氣色悪いわ……。八年経つとこんなに変わるものなのかな? (悪い意味で)」

「そりゃー八年経つとこんなに変わるのはよー凄いでしょうー。(良い意味で)」

そんな傍から見ると馬鹿っぽいやり取りを一人でしていると
フロアーの雰囲気が変わったのが分かった。"最強の殺
し屋"の登場であった。

指令6　自己中仙人とすけいまし（後書き）

やつと六話目をあげる事が出来ました……。お待たせして誠にすみません。今から大海原にダイブします！どなたも私の邪魔はしないで下さい……！

と言つのは「冗談です（笑）。まあ半分本気ですが、実行はしません。豆腐メンタルなので（苦笑）。

恋愛のはずなのに全くその要素が出ていないことをお許し下さい。次回はみはるさんを登場させます。ライカも出します。期待して下さい！

あと誠に身勝手なお願いですが、良かつたら本作の感想を下さい（必死）！例え罵りでもポジティブに受け止めて見せます！…優しい読者様が感想をくださることを切に祈りつつ、次話をなる早で書きたいと思います。それまで見放さないで下さい！

以上、夏ばで鰻が死ぬほど食べたい条理でした。

番外編 それぞれの夜（前書き）

ネタバレ含みます。“」注意ください。
読まなくてあまり差し支えありません。

先ほどから心臓の鼓動がひびくのを感じる。手の平には汗が滲んでいる。多分顔は多少赤くなっているであろう。自分の腰の辺りを見ると、愛しの彼女が体に頬擦りしている。そして私の体には彼女の両腕でがっちりとホールドされている。何やら柔らかい一つの感触があるが、気のせいだと自分に言い聞かせる。これは現実だ。こんなリアルな夢があつてたまるか。もしこれが夢だったら、起きた瞬間に枕元の目覚まし時計を容赦なく叩き潰しているであろう。そのついでに隣の部屋で寝息を立てている相棒を叩き起すことも勿論忘れない。

なぜこんなことを長々と語っているのかと訊つと、私にとつてまさしく夢のような、しかし現実の出来事が、今現在起こっているからだ。今私が居るのは彼女の家。――はその家のリビング。

彼女 みはるは家に帰つてくるなり、ずっと私に抱き付いているのである。

「はあ～、やつぱり珪ちゃんにくつこつと落ち着く～」

「……そう言つてもらえると嬉しいが、私の方は落ち着かないんだ。名残惜しいが離れてくれないか？」

私はそう彼女に一寧にお願いした。すると彼女は愛らしい唇を尖らせて、上田遣いで私を見ながら、甘えた声でこう抗議してきた。

「珪ちゃん。私のこと、大好きなんでしょう？」つやつやつつかれるの本当は嬉しいんでしょ？……それとも私への愛は無いつて言う

の？私のこと嫌いになっちゃったの？」

潤んだ瞳でそう言わると何も反論できない。私は「別にそういう事ではないんだ」と言った。その言葉を聞くと彼女は、先ほどとは打って変わって満面の笑みで、自信満々でこう言つた。

「ほり、やっぱり嬉しいんじゃない。離れる、だなんて言つから私のこと嫌いになつたかな、って思つちゃつたじゃないの。 今后はそう言つ誤解の招くような発言はお互い控えて行かないとね。じゃないと喧嘩が絶えないギスギスした関係になっちゃうからね。 気を付けてね、珪ちゃん 」

そう言つ彼女の後ろには悪魔の羽と尻尾が生えている ように見える。これが小悪魔というもののなのか……。前にレンが「小悪魔気質な娘つて色々可愛いよね～」などと言つていたが、確かに可愛いのかもしれない。が、はつきり言つて話の主導権を握らないと、逆にこちらが不利になる。あとで私からアイツに小悪魔に対する認識の甘さを教えておかねば。そもそも、今度はアイツが苦労させられることになる。

そんなことを考えていると、小悪魔な彼女は耳を疑いたくなつて、な発言をした…………！！

「じゃあこのままお風呂、一緒に入っちゃおつか 」

その後、私が全力で彼女を体から引き剥がしたのは言つまでもない。

* * * * *

現在地、最近巷で評判の喫茶店”cafeあめのひ”。ペンションをモチーフとしたお洒落な店内は、今はあたしと”彼”を含む数人のお客様しかいなかつた。あたしはこここの従業員として働いているのだが、ちょうど仕事終わりに”彼”が訪ねてきた。そして現在あたしと”彼”は角の席で向かい合わせで座つていた。”彼”こと藤島才君は、この店の人気メニューであるチョコクリンチパフェに手を付けず、あたしにこう話を切り出してきた。

「…………来華。体調はどうなんだ？風邪引いてないか？」

「真剣な顔してるから何かと思つたら、いきなりあたしの心配をするなんて……。やっぱりサイ君は過保護だね」

笑いながらそう言つと、彼は「笑い事じやないんだ」と真剣な顔を崩さなかつた。あたしは彼を安心させる為に「大丈夫だよ」と言つた。その言葉を聞いて彼は安心したようだつた。

あたしはパフェを指差し「早く食べないと溶けちゃうよ?」と言つた。すると彼は珍しく慌ててパフェを食べ始めた。どうやら余程あたしのことを心配してくれていたみたいだつた。彼の口に付いていたチョコクリームをナフキンで拭いてあげると、彼は子ども扱いするなど言つた。少し幸せな気分になつた夜であつた。

街中で本命とデート中、おれの彼女その一と遭遇した。その一ちゃんはおれに平手打ちをして走つて逃げていったのだが、今連れていった本命の彼女はおれの顔を見るまでは顔面にパンチを食らわせてきた。それだけならまだいい。彼女は拳を構えるともう一発パンチをおれに見舞つた。腰の入つた良いパンチがおれの体を襲う。ドゴッという音を久々に聞いた気がした。狙つた場所も鳩尾とピンポイントだった……！！

「グフツ……！いいパンチだな、流石のおれもきつついぜえ……」

足に何とか力を入れる。そのまま彼女は「こんなサイテー男こいつから願い下げよつ！！」と言う捨て台詞を吐き捨て、その場を足早に去つて行つた。おれは夜空を見上げて、ポツリと呟いた。

「失恋つて、やつぱりキツイわあ～」

腹の痛みが痛くてこの日は久しぶりに泣いた。おれにとつては厄日であつた。

番外編 それぞれの夜（後書き）

掲載がかなり遅れて申し訳ありません。前回なる早で書くと言つて
いた自分を激しくポカポカしたいです！本当にごめんなさい（涙）
本編を書こうとしていたら、何故かキャラ達がイチャイチャしてい
ました。
次回は必ず本編を書きますのでお許しください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4606r/>

殺し屋と花のような君

2011年11月11日12時07分発行